

研究課題

「活用力」を育てるICT活用のあり方
(Last Stage)

副題

～アグリ活動や製作活動、及び、それらを基盤とした探究活動・
交流活動の工夫・開発を通して～

学校名	秋田市立旭北小学校
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王三丁目1番35号
学級数	13
児童・生徒数	333名
職員数／会員数	23名
学校長	小林 千雪
研究代表者	小林 千雪
ホームページ アドレス	http://www.edu.city.akita.akita.jp/~khh-s/



1. はじめに

昨年度までの2年間、「“活用力”を育てるICT活用のあり方」を実践的に研究してきた。1年目は、「活用力」の基盤をなす「国語力における読解力・表現力」や「数理的な処理能力」を高めるためにICTをどのように利活用すればよいかを研究課題に授業実践を行ってきた。2年目は、自然事象にふれる体験活動（アグリ活動）を基盤として、そこで見出した課題を追究する活動を充実させ、既得の「読解力・表現力・数理的な処理能力」を一層機能的な「活用力」まで高めるためのICTの利活用を図ってきた。3年目の今年は、その集大成の年である。これまで活用力を高めるためにICTが有効であることが分かったが、平素の授業実践では準備等のハードルが高く、スムーズに行える状態ではなかった。そこで今年度は、ICTを活用するための条件を一層整備した。そして、アグリ活動等の「探究活動」や「交流活動」に子どもたちが主体的に取り組むことを通して「活用力」を高めることを目的に研究実践に取り組んだ。また、これまでの2年間の研究でICTの活用を通して、リテラシー教育、モラル教育の必要性も明らかになってきたので、このような新たな課題に対しても挑戦した。

2. 研究の目的

- (1) 子どもたちの「活用力」を高めるためのICTの有効な活用の仕方について明らかにする。（アグリ活動等の「探究活動」、異学年・保護者・地域との「交流活動」）
- (2) ICTを活用する際のリテラシー教育、情報モラル指導と

の関連について明らかにする。

3. 研究の方法

これまで、2年間の実践を振り返り、平素の授業でICTを活用するための条件について話し合い、次のような手順で研究を進めてきた。

- (1) アグリ活動等の「探究活動」、異学年・保護者との「交流活動」等の学習のどの場面で、ICTが必要かを明らかにする。【高めたい活用力との関係を鑑み】
- (2) 教室、特別教室等をどのように整備すれば、活用しやすくなるかを明らかにして、条件を整備する。【電子黒板等ハードの配置、無線LAN子機の配置】
- (3) 子どもたちが主体的に取り組む「探究活動」「交流活動」の授業実践を行う。
【活動の中でビデオコンテンツ、Webコンテンツを製作し、その中で活用力を高める。】
- (4) 子どもたちがICTを利活用する活動の中で必要となるリテラシー学習、情報モラルの学習について明らかにし、道徳等と関連させた授業実践を行う。
- (5) 授業実践を評価し、次年度にスムーズに生かせる形でまとめを行う。

4. 研究の内容

(1) ICTの活用場面の見直し

昨年度までの研究ではICTの活用が前面に出ていたために、「使うために使う」という感があり、効果はあるが、児童の

主体的な学習に結びつかないこともあった。例えば、アグリ活動を中心に進めてきたが、「デジタルコンテンツ」を作るために、観察したり、写真を撮ったりすることがあった。活用力の育成を目指しての取り組みであったが、子どもたちの心に起こる感触、色、においなどへの感動や新たな発見等が少なかったように思う。このようにICTの活用が先にあることで児童主体の問題発見の幅を狭めた事例があった。

そこで今年度は、子ども主体の学習を進め、その中でICTを効果的に利用する方法について検討していった。教師が「事象を提示するために使う」、「課題をもたせるために使う」、子どもが「調べるために使う」「誰かに伝えるために使う」等、学習の必要性の中で「どの場面」で「誰」が、「どんな機器」を、「どのように」使うのかを考えて実践をした。

(2) ICTを利活用するための環境整備

昨年度まで、電子黒板は、投影型（プロジェクター式）であった。今年度、モニター型の電子黒板を学団の共有スペースに設置した。投影型は起動までの準備に時間がかかるが、モニター式はスイッチ二つで起動する。そのため、電子黒板の利用が倍増した。

多くの児童が一斉に電子黒板で学習することで、中・高学年の児童がデジタルコンテンツで表現することの効果やおもしろさを感じていった。その結果、プレゼンテーションソフトの活用だけではなく、ムービーメーカー等を使った表現が行われるようになってきた。だが、モニター型は、画面の大きさが限られるという弱点がある。そこで、助成金を活用して、設定不要の投影型の電子黒板も導入した。広いスペースで、多くの子どもたちに説明する際に有効であり、これからますますの活用が期待される。



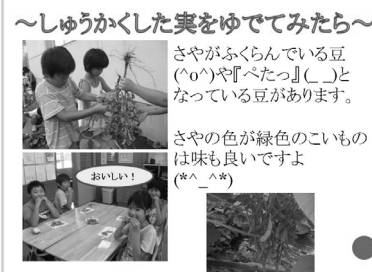
このように、ICTを「すぐに使える」環境にすることで実践の日常化が図られる。こうした視点に立ち、子どもたちが個々に使うコンピュータの配置や、プロジェクターの有効活用（スペース、人数に応じた活用）についても見直しを進めてきた。

5. 研究の経過

(1) デジタル栽培マニュアルの見直し（探究活動への利活用）

本校は、昨年度までの研究実践でアグリ活動を促進するために作られた「デジタルコンテンツ」がある。これは、過去2年間の取り組みによる栽培種の育て方や生長に係わるデータが載せられているものである。これを見ることで、栽培種ごとに「いつ」、「どのような作業」をどう進めればよいか分かり、栽培活動を主体的に進めることができる。本校では「デジタル栽培マニュアル」として使用している。

今年度は高学年の児童が前年度のものを「これから下の学年が使う」という視点から見直しをした。自分たちが使ってみて不足していることは何か、余計なデータはないかを見直し、来年度進級する子どもが分かる表現であるかどうかを考えて改良していった。リテラシーの力を高めながらも、「相手意識をもって伝える」という「活用力」を高める実践となった。また、学校で撮影した共有のデータ以外は使わないこと（インターネットからのコピーは禁止）も学習し、情報モラルの意識化も図られた。



(2) 「育てる・食べる・発信する」調理実習（探究活動への利活用）

昨年度までアグリ活動は栽培中心であったので、今年度は「食」の学習へと発展させた。6年生ではジャガイモを栽培したが、それをどのようにして食べるのか、いろいろな調理方法をインターネットで調べた。最初は、粉ふきいもやじゃがバターなど限られた料理しか思い浮かばない子どもたちであったが、ホームページには多くの情報があり、中には電子レンジを使った調理もあり、驚いていた。子どもたちは各グループで食べてみたい料理を決め、調理方法を調べ、チャレンジした。

調理実習では様子を写真に納め、その後デジタルレシピとしてまとめた。次年度、6年生が調理実習をする際の参考になるように、分かりやすくまとめることを心がけていた。

この実践では「育てる・調べる・発信する」というそれぞれの段階にICTをどう活用したらよいか、その適時性・的確性が明らかになった。

(3) 社会科新聞作りへの利用（探究活動への利活用）

6年生の社会科では単元の終末に追究したことを新聞にまとめる表現活動を行っているが、今年度は、一人一人の子どもの書いた記事をスク্যানで取り組み、学級全体で一つの新聞にまとめる学習活動を行った。電子黒板を使い、個々の記事を見て、紙面の配置や見出しを考えたりした。

最終的に教師が「朝刊太郎」（フリーソフト）を使って、新聞にまとめて発行した。（右図参照）次年度はこのソフトを用い、まとめる子どもたちに取り組みさせてみたいと思っている。



(4) 委員会活動の紹介（交流活動への利活用）

5年生の国語の学習に「工夫して発信しよう」（光村）という題材がある。自分が伝えたいこと、相手が知りたいことを番組を構成して、情報発信する題材である。一通りの学習をしてから、次年度委員会に所属する4年生に自分たちの仕事を知らせるビデオを作りたいという願いをもち、活動に取り組んだ。

自分が所属する委員会の仕事ができるような写真をデジタルカメラで撮影し、シナリオ書き、ビデオ制作へと向かった。使用したのはサウンドレコーダーとWindows movie makerである。自分たちでアナウンスを録音し、それを movie makerに取り込み編集していき、紹介番組にまとめていった。編集作業では、アナウンスの発音、音量、速さなどを確認し、伝わらないものは取り直し、再度編集し直し、よりよい番組作り心にかけていた。ここでも国語の「話す力」が実際に伝える「活用力」となっていた。また、相手意識を考えた発信として、「正確誠実な発信」、「自分の情報への責任」についてのモラルを学習することができた。

(5) 学校紹介ビデオ制作（交流活動への利活用）

今年度、本校は「夢☆チャレンジ」という児童会テーマの下に、多くの活動に取り組んできた。その総まとめとして、学校あげてテーマに沿った「学級紹介」を行い、一本の学校紹介のビデオを作成した。各学級でどのような内容にするかを話し合い、表現の仕方を決め、練習をしてビデオ撮影を行った。自分たちのクラスのよさを伝えるためにどうしたらよいか、それぞれが相手意識をもって取り組んでいた。朝の時間に全校でそれを視聴した。視聴することで、他の学年・学級のよさや頑張りを知り、交流することができた。このような場面でのICTの活用はこれからも広がっていくと思われる。

6. 研究の成果と今後の課題

- 子どもたちの「活用力」を高めるためにアグリ活動等の「探究活動」、異学年・保護者との「交流活動」等の学習のどの場面で、ICTが必要かが明らかになってきた。
- ICTをすぐに使える環境に整備すれば（ハード&ソフト面）効果的に活用することができるばかりではなく、子

どもたちのやる気を引き出し、高めていくことができることも分かった。

- 「伝える」場面でICTを活用することは有効である。相手意識をもった表現活動において、その活用力を高めることができる。
- デジタルコンテンツを作成する中で、リテラシー指導と共に情報モラルの学習を関連づける。その中で押さえたい事項については、コンテンツ作成の中で指導することができる。それを道徳等と関連づけて指導することで効果があがる。
- ICTの指導実践を通して、「情報モラル年間指導計画」が作成された。次年度以降、これを基にICTの活用がさらに充実することと考えている。
- ICTを利用することで、子どもたちの「活用力」を伸ばすことができることが分かったが、今年度は「表現力」の育成場面の実践が多かった。他の場面での利活用をこれからも平素の実践の中で広げていくことが課題である。



7. おわりに

授業の中の「ここぞ」という場面でICTを使うことや子どもたちがデジタルコンテンツを作ることで活用力が高まってくるのが分かってきた。また、リテラシーやモラルの学びと関連づけることができたことも大きな収穫であった。

本校は、この3年間で機器も設備も充実してきた。さらに、チョークや黒板を使うように、普段の授業でさっとICTを使うことができるような環境や指導体制にすることが本校のこれからの目標である。それを目指し、次年度も日々の実践を積み重ねていきたいと思う。